微笑習得以前

滝川笙子

微笑習得以前

滝川笙子
出身地　茨城県日立市
〒228　神奈川県相模原市御園2-6-23　藤本方

微笑習得以前　七〇〇円

昭和五十四年四月三十日　発行
著者　滝川笙子
発行者　石澤三郎
発行所　株式会社　栄光出版社
(〒一四〇)東京都品川区東品川一―三七―五
電話東京(四七一)一二三五(代)
振替東京七―六二三五〇

印刷　江戸川印刷所
製本　田中製本印刷

0093―7910―0608

微笑習得以前

この作品は、『時間と空間』誌主宰、上田周二氏に添削御指導を仰いだものです。出版に際して深く謝意を捧げます。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

妙は六年生のときに笑わなくなった。笑いたくても我慢してしまうのだ。家より学校で殊に担任の猫柳の前では決して笑わない。猫柳は授業中も駄洒落を飛ばして始終生徒をおかしがらせるので最初は容易なことではなかったが、机の角を見詰めて歯を噛み締める稽古を重ねるうちに、級中がげらげら笑いこけても笑わないでいられるようになった。教室外でも猫柳が視界に居れば、眼を伏せてにこりともしなくなる。家や友達の前ではそう依怙地な我慢はしないから、小さな笑いだけが噛み殺された。だからその分けたたましく噴き出したり、本に読まれて無暗ににやついたりするようにもなったけれど、生来の愛敬は消しゴムでこすり取られたみたいに消え失せて、砂の多いコンクリート面にも似て強張った顔付きの、変な女の子になってしまった。敗戦の翌年の、中断していた学芸会が復活した後のことである。

戦争で中断される前、妙は学芸会で主役をもらっていたのだが、復活するとすっかり事情は違っていた。妙は端役ももらえず、従って全然舞台に出られな

くなって、のっぽで朗読のうまい男生徒と二人で演出係というものに任命された。演出係とは何のことかと思ったが、裏方さんのことだった。背景を描き小道具を作り、衣裳の調達方まで含まれる役目で、劇の構成や進行や指図とはおよそ関係ないのだった。演出家というのは大体知っていたけれど演出係の方はずいぶん違うなあと首を捻りながら、妙はのっぽ君と暗くなるまで居残りをして「青い鳥」の上演準備に働いた。猫柳はときどき二人を手伝って「舞台は演出家のものなんだよ」と慰めるように言ったけれども、演出係とはやはり言わなかったのだ。

ミチル役の美少女に、妙は一張羅のワンピースを貸した。衣料不足の時代で他から調達するのは大変だったし、その子は家も近い親友だったから。黒っぽいウール地に毛糸で水玉を刺しゅうして白衿を付けたワンピースは、樵の娘のミチルにぴったりだと猫柳も言い、あどけない顔立ちの親友に誂えたようによく似合ったので、妙もそのことは喜べた。だが戻された一張羅は、持ち主には似合わなくなっていた。それを着て鏡台の前に立った妙は先ず立ち竦み、それから誦んじているミチルの台詞を喋ってみた。いろんな顔付きをしてみた。首を傾げ、スカートを摘んで動いてみた。動けば動くほど親友の演じたミチルと

違ってしまう。違っても眼に快ければいいのだが、唇を閉じて立ち竦んだままの方がまだしも醜さの度合いが少なかった。妙は鏡の顔に真っ黒い×印を滅茶滅茶に被せて服を脱ぎ「もうこれ着ない」と母親に言った。

生れて初めて陥った深刻な不幸について、妙は考えた。誰が不幸の犯人か。親友の美少女は飽くまで妙に好意的で、朝晩慕って来ると言ってもよいくらいだし、鏡の前で舞台はまず見るものだということが厭というほどわかったから、猫柳が配役を誤ったのでもない。猫柳を恨もうとした方が誤りだった。犯人は美しくないのに舞台に出たがった自分ではないか。自分なんか殺してやろうと妙は思い、家にあった硫黄の塊を叩いて粉にして、封筒に詰めて抱いて寝た。父母が寝静まったら飲むつもりで眠ってしまい、朝恐くなって硫黄を捨てた。それから更に考えて、醜い顔でも生きていなければならないからには、せめてそれより醜くならないように、顔をなるだけ崩すまいと決めたのだった。そうして笑いを殺して顔を押し固め、滑稽にも意図とは逆に、より醜くなる訓練を始めたのである。

笑わない顔は、まもなく猫柳のよく動く眼に止まり、妙は放課後問い糺された。

「どうしたんだいったい、どこか悪いのか」
妙が黙っていると猫柳は妙の両手を掴んだ。
「どこも悪くありません」
と言いながら手をもぎ放そうとしたが、猫柳は放さない。傍に寄るだけでも移りそうなニオイを猫柳は毛むくじゃらの全身から発散している。手を掴まれているときっとニオイが染み込んで落ちなくなってしまう。妙は手を放してほしい一心で「何でもないです、こんどから笑います」と言ったが、それでも放さない。妙は泣きたくなりながら教室の外を流れるかなりの勾配の川の音に必死で耳を傾け、自分を預けるように努めて立っていた。
「話してくれよ、なあ、先生と妙とは昨日今日の仲じゃないだろう。何が気に入らないんだい。委員長がそんなじゃ先生もやりにくいじゃないか、お父さんも心配してたぞ。家でも難しい顔してるってな。本の読みすぎかもしれないと言ってたよ。この頃表へも出ないんだって。こんどまた釣りに行こうや。本ばかり読んでちゃ駄目だ。本当に顔色もよくないよ。聞いてるのか妙は」
猫柳は妙の父親の同僚だった。父の用事で妙が休日の学校へ来ると、彼が裸足で花壇を這い回っていた。学校中の花壇を猫柳は一人でつくっているのだ。

なぜ誰も手伝わないのだろうと思いながら妙が見ていると「手伝うか」と猫柳が言い、二人で球根を幾十個か植えた。それから家へ遊びに行った。釣りにも山越えでついて行った。猫柳の家には妻がいなくて、道具もろくにない。妻は不器量な女だから追い出して別居中なのだと妙の母親が父親に言っていた。がらんとした家で妙は猫柳の力こぶにぶら下がり、ぐるぐる回されて笑いこけた。抱っこしてやるから白髪を抜けと言われればそうしたし、肩車さえ辞さなかった。戦時中猫柳は剣道を教え、ついでになぎなたも教えていた。戦後はそれを禁じられて花ばかり作っているのかもしれないが、男生徒を相変らずぶんなぐり、女生徒を甘やかした。女は賞めればつけ上がり、なぐれば泣くし、叱ればスネて、くさせばぐずぐず文句を言い、殺せば夜中に化けて出ると、歌うように猫柳は口にして、だから女は可愛がるしかなかろうがと結論し、女生徒はなぐる代りに鉄のたわしに似たひげの剃り跡をこすりつけられる。男生徒はなぐられても猫柳を好いているが、女生徒は鼻をそむけて近寄られないように用心している。妙も六年生になってからは、遠くからしか好きでなかった。

「女の子はすぐに変っちゃうなあ、いつのまにそんな大人になったんだ妙は。あの笑い虫の騒ぎ虫が、自分で変だと思わないのか」

猫柳の机の傍の壁には、黒板と同じ高さで短冊が一枚貼ってある。

〈伸ばしたる腕のしろさや猫柳〉

それは教科に俳句が登場したとき、これはみんなが作っちゃいけないというお手本と言って貼り出したものだ。猫柳というのは妙のつけた綽名である。毛むくじゃらの猫柳が腕のしろさに無上の価値を付与したい気持は妙にもおぼろげにわかる気がして、そういう率直さは嫌いでない。父兄会にも短冊は外されなかったから、妙の母親は「あんなものを」と父親に言っていたけれど、ニオイと触られる恐れを除けば猫柳は正直で活気溢れる愉快な先生なのだ。

「どうしても言えないのか」

人に平然と言えるようなら笑わない覚悟を固めたりはしない。母にも兄にも告げていないのだ。ただ家の来客を、これまでよりも見ないようにしてかえって詳しく見定め、帰った後母親に「あの人はあんな顔で笑った」と言ったり「笑う門には福来たる、器量が悪くても人相がよければいいんだよ」と母親が言い返せば「悪い顔は壊れるだけだわ」と更に言ったりする。それ以上説明するにはまだ言葉も乏しく、詳しく説明しようとすれば、詳しく顔を見られてしまうと思えてやはり何にも言えなくなるのだった。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

猫柳は長々と喋り続け、握られた手が熱く湿って粘り付く不快感を懸命に堪えていると胸の辺りがむかむかして来た。

「やっぱり先生に怒ってるのか」

妙は唇を引き結んで眼を瞑った。ちろちろ火の粉が飛び交うような瞼の闇に握られた手の感触がいちどきに広がり、窓の外の川の音がふいに消えた。

「おい、どうしたんだ」

猫柳が手を引っ張って揺さぶった。

「手を放してよ、なぐってもいいから」

ひどく驚いて猫柳は手を放した。

「ふうん、そんなに先生が嫌いか。先生はそんなに悪い先生なのか」

それを聞くと妙は猫柳が可哀想になったが、言葉に換えられない大きな凝りが胸につかえて自分の感覚も感情も整頓することができなかった。

教室を出た妙は校舎の外にある足洗い場へ走った。そこには川の引き水が太い鉄管からごぼごぼと流れ放しになっている。手を洗う深い水槽に両手を突っ込んで、痛くなるまでこすり合わせたが、果たして手のニオイは消えなかった。お風呂に入っても落ちなかったら友達に嫌われる、と思えて妙はなお気が

気でなく、せかせかと鞄を取りに戻った。暮れかけた教室では隣りの担任のレグホンが笑い声をあげていた。正視できないほど盛り上がったセーターの胸を揺すって彼女は笑う。妙が入って行くと猫柳が彼女を放すのが見えた。妙はほっとして半ば胸のつかえが取れた。大人の本を盗み読んでいた妙には、猫柳が自分の手を、腕のしろさやと無関係でない摑み方をしたのではないかと余分に勘ぐられたのである。そういえば自分の手は黒くはないがまだかなり骨張った子供の手だったと気付いた。

「何だ、まだ居たのか。惜しいところへ来るなあ、まったく」

猫柳は大声を出して、大人の時間だから帰れ帰れと促した。

橋に繋がる校門を出るとき、妙は教室の窓下の川縁の花壇に猫柳と二人で球根を植えたことを思い出した。ズボンを捲り上げ、毛むくじゃらの足を土まみれにした猫柳は、肥料を深く敷き込んでならした畠に穴を開け、妙は球根を置いて土を被せる。球根と言えないような小さな塊もあった。

「これはなあに、干涸びてるみたい」

「それはアネモネ、姉も寝たから妹も寝よう」

「え、姉も寝たから妹も寝よう」

聞き返すように真似ると猫柳は頷いて笑い、淡い疑念にどこかを擽られて妙もころころ笑った。前年のその日も暮れかけていた。あの愉快がなぜこの不快に育つのだろう。妙は薄っぺらなザラ紙の教科書の入った木口の手提げを交互に持ち替えては手のニオイを嗅ぎながら、川添いの坂を下った。

まもなく妙の母親が猫柳に呼ばれ、母親はその足で妙を病院へ伴った。医者は首を捻って虫下しを処方し、妙はその場でヒマシ油を飲まされて注射を打たれた。虫は一匹も出なかったが、想像の回虫にかなり脅かされたので、妙の笑わない虫はいよいよ深く食い付いた。

中学に上がると、妙はもう一度舞台から閉め出される。「青い鳥」の場合は妙の身勝手な願望だったが、市内全校の演劇コンクールに参加する「孝女白菊」には、職員会議で妙が候補に挙げられたのである。それを知らなければまだしもだったが、聞き合わせた子が注進にとんで来て告げた。勢力のある女教師が妙の名を持ち出すと教頭が「市内対抗だから、あれじゃ顔が」と言って、他の子に決まった、と。他の子というのがミチル役みたいな美少女なら妙は、ああまたかと思えばよかった。だがその子はどう見ても美貌でなく、しかもや

や見苦しく肥えていたのだ。あれでは孝女白菊ではなくて孝女黒菊か孝女焦げ菊か、でなければ孝女デブ菊になってしまうと思うが、それよりもっと悪いと、妙は宣告されたことになる。この不幸の犯人も教頭ではなく、恐らく妙の強張った顔付きと、そこに吹き出して来たニキビだった。もし教頭の反対がなければ孝女白菊は、黒菊より焦げ菊よりデブ菊より醜い、孝女コンクリ菊か孝女ブツブツ菊か孝女化け菊だと観客に言われたろう。笑わない顔が今度は原因にもなって、笑えない事態を惹き起こしたのだった。

高校に入ると妙は最初の身体検査で肺浸潤を発見されて一年休学し、落第した。それは表で顔を強張らせる結果家では夜更けまで雑多な本に向かって一人で百面相をする悪習の招いた必然的な成り行きだった。本に読まれるなら読むなと、叱られても叱られても電気スタンドに服を被せて頁をめくる音にも神経を研ぎながら眠りを削った報いだから、これも誰も恨むことはできない。卒業までに病気は直ったが、こうして三重に強張らせた顔付きは俄かに直しようがなく、妙はすべての就職試験に面接で落ちた。ひどい不景気で、町を支える大工場も僅かしか女子を採らず、妙の同期生も大半職を得られないまま卒業しなければならない年だった。

妙は世の中に拒まれた顔を無理に晒して歩くより、家に居て本を読みたかった。だが既に兄が病身で家に居た。小児喘息を年々こじらして妙の兄は進学も就職もできないのである。それで、奨学資金が借りられて家から通える大学なら受けてもよいと家では言ったのに、妙は就職と決めたので、今更落伍者になるわけにはいかなかった。卒業式の後妙はセーラー服を自分でツーピースに縫い直し、それを着て職業安定所に通った。町工場商店などがぽつりぽつり紹介されたが、結果は卒業前の試験と同じだった。中小企業主たちは、人を選び拒むことについて、官公庁や大企業の試験官たちよりもずっと強く、後ろめたさと罪の意識を感じているらしく、何とか雇ってあげたいけどねえ、という様子で妙の方が気の毒になるような按配だったけれども、やっぱり「その顔付きがどうもねえ」という言わない声を、最後に顔に表すのだった。

五月にやっと、妙は父親と叔父の縁故で隣り町の幼稚園に職を得た。幼稚園こそは、うまく笑えない顔に最も適さない職場の筈だったが、そこは公立でも私立でもなく、専門家のいない工場立であったために、人選が厳しくなかったのである。隣り町まで延びた大工場の、密集した社宅の中に、集会場を一部改造した無認可の幼稚園が、その五月に開設されて、妙の父親と同じ学校にいた

女教員が主任になっていた。工場で面接を受けると、作業服の幼稚園設立責任者は、妙の顔も見ないで履歴書に眼を走らせ、では今から行ってみてくれますかと道順を告げて慌ただしく席を立った。幼稚園でまた面接があるのだろうと妙は思いながら、線路沿いの国道を歩いた。町が尽きて田畠が広がりはじめたところに幾百かの社宅が見え、ひとつだけ大きな屋根の幼稚園もすぐに知れた。木柵の庭はおしるしばかりの広さで、舞台とホールだけやけに大きい建物だった。

広い玄関に続く板敷きのホール中央部に緑色の絨毯が敷かれ、何十人かの幼児がそこにうずくまって紙芝居を見ていた。見せているのが淡い記憶のある女教員だ。彼女は妙を認めるや旧知のように笑いかけて手招きし、思わず靴を脱いで近付くと、半月前に手が足りないまま開園したところだと、妙に言い終るや否や子供の方へ向き直って言った。

「さあ今日から桜組はこのセンセですからね、星沢センセ、みんなで言ってみましょう」

「ホシザワセンセー」

幼児群は一斉に溜めていた声を張り上げ、妙が耳を塞ぎたい気分で青くなっ

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.